

■ 表現学部

ー ディプロマ・ポリシー(学位授与方針)

知識・技能	①現代の情報社会・日本社会を生き抜くための教養と知的技能を持つ。現代社会の機構・機能・組織を知り、表現に関する専門知識、表現文化・メディア表現について体系的に理解できる。 ②専門課程で学ぶプロフェッショナルの理論と技能で、自分を表現する方法を持ち、情報社会に向けて自分の考えを発信できる。 ③自ら設定した表現課題（クリエイティブライティング、情報文化デザイン、街文化プランニング〈ライフデザイン〉、放送・映像メディア、アート&エンターテインメント）の知的領域の表現方法を考察し、構想することができる。
思考・判断・表現	④問題を自ら発見し、表現という方法で解決することができる。 ⑤多様な価値観を理解し、批評意識を持ち、問題を自ら発見し、論理的・創造的に表現できる。 ⑥メディアリテラシーと表現の、倫理に関する知識を基準にしたコミュニケーション・情報発信ができる。 ⑦知識集約型社会を見据えて、自らの専門分野の学問領域と他の学問領域を統合的に学び、多面的・重層的な思考をすることで、複雑で多様な現代社会の課題に応えることができる。
関心・意欲・態度	⑧日常生活とヴァーチャル生活との二元的認識が所与の条件となった現代社会において、片方に偏することなく中道精神を貫くことができる。 ⑨デジタル時代に必要不可欠な読解力・思考力・コミュニケーション力の向上に対し積極的であり、自らの作品や表現をいかにデザインするかを理解した上で、社会の発展に活かすためのオペレーションを身につけている。 ⑩他者の作品や表現を評価するにあたっては、クリエイターの個性を尊重する態度とともに、深く理解した上で正当な評価をしようとする姿勢を身につけている。 ⑪他者と協働しながら作品を創造することの喜びや有用性を知悉しており、共同作品を作成する意欲を有している。

ー カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

教育内容	①ネットワーク化が進む現代の情報社会を生き抜くための教養と知的技能を持つ。 ②専門教育においては、各専門分野における知識・技能を体系的に修得するとともに研究方法の理解と実践を進めるため、共通科目、基礎ゼミナール、専門ゼミナールのほか、選択科目として方法研究科目、応用科目などを系統的に配置する。実習を重視し、さまざまな状況に的確な判断と行動がとれる学生を社会に送り出すために、全カリキュラムの4分の1以上、3分の1以下の実習時間を設定する。学生が自らの関心に合わせて主体的に実習内容を選択し、智慧の実践を実現するための実習である。 ③PBL（Project-based Learning）を導入し、学生の主体的アプローチによってプロジェクトの
-------------	--

	組織・運営、複数コースにまたがったプロジェクト運営、グループによる成果物制作などをおこなうことを通じ、個々の特性発揮と役割分担を両立させる能力を養う。設定した到達目標へ向けて試行錯誤を繰り返しながら学修する。 ④初年次教育において学生のニーズにあわせた主体的な学びをサポートするために、基礎科目にふさわしい内容の科目（学科が網羅する表現手法の全体像の把握、自己肯定力を高めるためのセルフマネジメント、情報発信者としての基本的倫理観、グループマネジメント能力の涵養等）を配置する。 ⑤卒業後の進路を見据え、各専門分野における知識・技能を体系的に修得するとともに、研究方法の理解と実践を進める専門教育を徹底する。各分野の専門性に根差した科目展開とともに、学生ひとりひとりのニーズに合わせた自由な履修構成が可能とする。 ⑥専門教育理解のための研究・演習の単科科目を多数設け、常に学生の方角性を調査し、それにあわせて、科目内容をブラッシュアップし続けるものとする。 ⑦演習・実習を中心とした専門教育を実施する。2年次は、ワークショップ、3年次・4年次に専門ゼミナールと、1週間に複数時限（基本は3限連続）にわたる科目を設ける。 ⑧外部への発信を見据え、主体的に情報発信できる技術を実践的に身につけられるように、講義だけではなく、実習や作品作り、発表、プレゼンテーションを中心においたカリキュラムを編成している。自ら設定した表現課題（表現文化の分野では、クリエイティブライティング、情報文化デザイン、街文化プランニング〈ライフデザイン〉、メディア表現の分野では、放送・映像メディア、アート&エンターテインメント）の知的領域の表現方法を考察し、構想することができる。
教育方法	①共通教育のみならず、専門教育でも、アクティブラーニングをメインとし、他者との協働によって問題解決に取り組み、発表する機会を設けている。 ②知識や技能を身につけるために、学生と教員の距離の近さを意識した少人数での学習を重視し、ワークショップやフィールドワークなどを進める。卒業論文あるいは卒業制作を全学生に課すことにより、学修成果を論理的・創造的に表現し、自らの達成を確認する機会を設ける。 ③学生同士が互いの作品プレゼンテーションをめぐって意見交換し、批評し合う機会（検証・批評の場）を科目ごとに設けている。作品批評や、プレゼンテーションと質疑応答、スピーチコミュニケーション、合評会を行うことで、互いを高め合い、個々の学修進捗の確認やパフォーマンス改善等につなげることを可能とする。 ④毎年期末に成果を社会に発信する機会（成果報告書／報告会）を設ける。自らの作品に対する社会からの率直な評価を受けることにより、履修者の精神的成長をうながす場として効果的に機能させる。
評価	①4年間の総括的な学習成果については、全学生に課される卒業論文あるいは卒業研究・卒業制作とその発表を対象に担当教員が評価と口述試験を行い、DPで示された資質・能力の達成状況进行评估する。 ②作品づくりや表現発信については、教員による評価及び改善点の指摘に加え、学生間での相互評価を行う。成績をつけて終わるのではなく、教員と学生との話し合いを通じ学生の成長に向けた適切なロードマップの作成と見直しを、PDCAサイクルによって実施する。 ③成績評価については、学生からの問い合わせに常時対応し、評価基準も開示する。

	④学部教育の改善については、教員 FD と学生希望調査を通じて、カリキュラムアセスメントを実施し、教育課程を常に見直し、継続的に改善を行う。 ⑤卒業時には、カリキュラム改善の指標とするため、質問紙法や面接調査法を用いて学生生活全般に対する総括的評価を行い、KGI（目標達成指標）をもとにカリキュラムの PDCA サイクルを推進していく。
--	--

ー アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）

知識・技能	① 学科の学びに必要な基礎的な知識を有している。 ② 高等学校で履修する国語、地理歴史、公民、外国語、数学の内容を理解し、高等学校卒業相当の知識を修得している。
思考・判断・表現	③ 表現文化に関連する事象に深い関心を持ち、高等学校までに学んだ知識・経験を踏まえ、自身の興味関心の有り様を、自らの言葉と視点で順序だてて説明することができる。または表現することができる。 ④ 文化、SDGs などを含めた文化の在り様に関心を持ち、多様な考え方を自分なりに整理し考察することができる。
関心・意欲・態度	⑤ クリエイターへのあこがれを持ち、表現することに強い意欲を持っている。 ⑥ 読む、書く、話す、聞く能力の向上や他者に伝わる表現方法の習得に意欲を持っている。 ⑦ 自分だけではなく他者の立場に立って物事を考え、配慮ある行動をする姿勢を持っている。 ⑧ 自らの学びを通して、地域や社会に積極的に関わろうという意欲を持っている。 ⑨ 文化や歴史、現代の生活、経済、国際社会にかかわる様々な問題に対して深い関心を持っている。 ⑩ 文字メディア、映像、デジタルメディア、WWW など多様なメディアから発信されるニュース・表現に積極的に接し、自分なりの見解を持とうとする意欲を持っている。

■ 表現文化学科

ー ディプロマ・ポリシー(DP)

表現文化学科は、大学が掲げている教育ビジョン「4つの人となる」を、生涯を通じて体得していこうとする学生を育成するために、表現文化学科の教育課程を修了し、以下の資質・能力を備えた学生に学位を授与します。

知識・技能	①情報社会/現代社会の機構(mechanism)を高度に分析、自己の表現技能において活用できる。 ②情報社会/現代社会の機能(function)を知り、自己の表現技能において活用できる。 ③情報社会/現代社会における組織(system)を高度に分析、組織を活用した表現技能を有している。 ④専門課程で学ぶプロフェッショナルな技能により、総合的に自分を表現する方法を持ち、社会に向けて、自らの考えを発信できる。 ⑤自ら設定した表現課題(クリエイティブライティング、情報文化デザイン、街文化プランニング〈ライフデザイン〉)の知的領域の表現方法を理解し、構想することができる。
思考・判断・表現	⑥ハードウェア/ソフトウェア、ファインアート/エンターテインメント、メインカルチャー/サブカルチャー、純文学/大衆文芸、など従来の二項対立を無批判に受け入れることなく、現代の動向への確かな認識を踏まえた上で、問題を自ら発見し、クリエイティブな思考、判断をすることができる。 ⑦多様な価値観を理解し、自らの意見を、論理的・創造的に再構築、社会一般に伝達することができる。 ⑧メディアリテラシーと倫理に関する知識を基準にして、コミュニケーション・情報発信できる。 ⑨知識集約型社会を見据えて、自らの専門分野の学問領域と他の学問領域を統合的に学び、多面的・重層的な思考をすることで、複雑かつ多様な現代社会の課題に取り組むことができる。
関心・意欲・態度	⑩日常生活【自らの身体を通じての世界との接触】とヴァーチャル生活【メディアを通じての世界との接触】との二元的認識が所与の条件となった現代社会において、片方に偏することなく中道精神を貫くことができる。 ⑪自らの作品や表現をいかにデザインし、社会の発展に活かすためのオペレーションを身につけている。 ⑫他者の作品や表現を評価するにあたっては、クリエイターの個性を尊重する態度とともに、深く理解した上で正当な評価をしようとする姿勢を身につけている。 ⑬他者と協働しながら作品を創造することの喜びや有用性を知悉しており、共同作品を作成する意欲を有している。

ー カリキュラム・ポリシー(CP)

表現文化学科は、ディプロマ・ポリシー（学位授与方針）に示した資質・能力を総合的に身につけている学生を育成するために、以下のカリキュラムを編成します。

教育内容	①状況に応じた的確な判断と行動がとれる学生を社会に送り出すために、全カリキュラムの4分の1以上、3分の1以下の実習時間を設定している。学生が自らの関心に合わせて、主体的に実習内容を選択し、本学の建学の理念のひとつである智慧の実践を実現するための実習である。 ②学生が必要に応じて主体的にプロジェクトの運営組織を構築し、適性などを見極めながら役割分担を決め、到達目標の達成へ試行錯誤を繰り返すPBL(Project-based Learning)を実施する。 ③初年次教育において学生のニーズにあわせた主体的な学びをサポートするために、基礎科目にふさわしい内容の科目(学科が網羅する表現手法の全体像の把握、自己肯定力を高めるためのセルフマネジメント、情報発信者としての基本的倫理観、グループマネジメント能力の涵養等)を配置する。 ④卒業後の進路を見据え、自らの専門分野における知識・技能を体系的に修得するとともに研究方法の理解と実践を進める専門教育を徹底する。コースの区分にとらわれず、学生ひとりひとりのニーズに合わせた自由な履修構成を可能とする。 ⑤専門性向上に資する単科科目を多数設置する。これらの科目については、学生のニーズをきめ細やかに把握した上で、これに応じて科目をブラッシュアップし続けるものとする。 ⑥演習・実習を中心とした専門教育を実施する。2年次は、ワークショップ、3年次・4年次に専門ゼミナールと、1週間に複数時限(基本は3限連続)にわたる科目を設ける。 ⑦実践を通して主体的に情報発信できる技術を実践的に身につけられるように、講義に加え、実習やコンテンツ制作、発表、プレゼンテーションも軸としたカリキュラムを編成する。インターンシップなど外部団体との連携を通じて、実際の仕事現場に立つ就業体験の機会も設ける。
教育方法	①共通教育のみならず、専門教育においても、アクティブラーニングをメインとし、他者との協働によって問題解決に取り組み、発表する機会を設けている。 ②専門的な知識や技能を身につけるために、学生と教員の距離の近さを意識した少人数での学習を重視し、ワークショップやフィールドワークなどを進める。卒業論文あるいは卒業制作を全学生に課すことにより、学習成果を論理的・創造的に表現し、自らの達成を確認する機会を設ける。 ③学生同士が互いの作品やプレゼンテーションをめぐって意見交換し、批評し合う機会(検証・批評の場)を科目ごとに設けている。作品批評や、プレゼンテーションと質疑応答、スピーチコミュニケーション、合評会を行うことで、互いを高め合い、個々の学修進捗の確認やパフォーマンス改善等につなげることを可能とする。 ④毎年期末に成果を社会に発信する機会(成果報告書/報告会)を設ける。自らの作品に対する社会からの率直な評価を受けることにより、履修者の精神的成長をうながす場として効果的に機能させる。
評価	①4年間の総括的な学習成果については、全学生に課される卒業論文あるいは卒業研究・卒業制作とその発表を対象に担当教員が評価と口述試験を行い、DPで示された資質・能力の達成状況を評価する。 ②作品づくりや表現発信については、教員による評価及び改善点の指摘に加え、学生間での相互評価を行う。成績をつけて終わるのではなく、教員と学生の話し合いを通じ、学生の成長に向けた適切なロードマップの作成と見直しを、PDCAサイクルによって実施する。 ③成績評価については、学生からの問い合わせに常時対応し、基準も開示する。 ④学部教育の改善については、教員FDと学生希望調査を通じて、カリキュラムアセスメントを

	実施して教育課程の見直しを図り、継続的に改善を行う。 ⑤卒業時には、カリキュラム改善の指標とするため、質問紙法や面接調査法を用いて学生生活全般に対する総括的評価を行い、KGI（目標達成指標）をもとにカリキュラムのPDCAサイクルを推進する。
--	--

ー アドミッション・ポリシー(AP)

表現文化学科は、ディプロマ・ポリシー（学位授与方針）に示した資質・能力を総合的に身につけている学生を育成するために、以下の資質・能力を備えた学生を求めます。

知識・技能	①学科の学びに必要な基礎的な知識を有している。 ②高等学校で履修する国語、地理歴史、公民、外国語、数学の内容を理解し、高等学校卒業相当の知識を修得している。
思考・判断・表現	③表現文化に関連する事象に深い関心を持ち、高等学校までに学んだ知識・経験を踏まえ、自身の興味関心の有り様を、自らの言葉と視点で順序だてて説明することができる。または表現することができる。 ④文化、SDGs などを含めた文化の在り様に関心を持ち、多様な考え方を自分なりに整理し考察することができる。
関心・意欲・態度	⑤クリエイターへのあこがれを持ち、表現することに強い意欲を持っている。 ⑥読む、書く、話す、聞く能力の向上や他者に伝わる表現方法の習得に意欲を持っている。 ⑦自分だけではなく他者の立場に立って物事を考え、配慮ある行動をする姿勢を持っている。 ⑧自らの学びを通して、地域や社会に積極的に関わろうという意欲を持っている。 ⑨文化や歴史、現代の生活、経済、国際社会にかかわる様々な問題に対して深い関心を持っている。 ⑩文字メディア、映像、デジタルメディア、WWW など多様なメディアから発信されるニュース・表現に積極的に接し、自分なりの見解を持とうとする意欲を持っている。

■ メディア表現学科

ー ディプロマ・ポリシー(DP)

メディア表現学科は、大学が掲げている教育ビジョン「4つの人となる」を、生涯を通じて体得していこうとする学生を育成するために、メディア表現学科の教育課程を修了し、以下の資質・能力を備えた学生に学位を授与します。

知識・技能	①情報社会／現代社会の機構（mechanism）を高度に分析し、自己の表現技能において活用できる。 ②情報社会／現代社会の機能(function)を知り、自己の表現技能において活用できる。 ③情報社会／現代社会における組織(system)を高度に分析し、自己の表現技能において活用できる。 ④専門課程で学ぶプロフェッショナルな技能を駆使して総合的に自分を表現する方法を持ち、社会へ向けて自らの考えを発信できる。 ⑤自ら設定した表現課題（放送・映像メディア、アート&エンターテインメントワーク）の属する知的領域の表現方法を理解し、構想することができる。
思考・判断・表現	⑥ハードウェア／ソフトウェア、ファインアート／エンターテインメント、メインカルチャー／サブカルチャーなど従来の二項対立を無批判に受け入れることなく、問題を自ら発見し、クリエイティブな思考、判断をすることができる。 ⑦他者との違いを認めて多様な価値観を理解し、自らの意見を論理的・創造的に再構築して社会一般に伝達することができる。 ⑧メディアリテラシーとエシカルに関する知識を基準に、コミュニケーション・情報発信ができる。 ⑨知識集約型社会を見据えて、自らの専門分野の学問領域と他の学問領域を統合的に学び、多面的・重層的な思考をすることで、複雑かつ多様な現代社会の課題解決に取り組むことができる。
関心・意欲・態度	⑩デジタル時代において必要不可欠とされる読解力、柔軟な思考力、コミュニケーション力の向上に対して貪欲に取り組む姿勢を堅持できる。 ⑪日常生活（自らの身体を通じた世界との接触）とヴァーチャル生活（メディアを通じた世界との接触）との二元的認識が所与の条件となった現代社会において、片方に偏することなく中道精神を貫くことができる。自らの作品や表現を社会の発展に活かすためのオペレーションを身につけている。 ⑫他者の作品や表現を評価するにあたっては、クリエイターや創造をプロデュースする立場の個性を尊重し、深く理解したうえで正当な評価をしようとする姿勢を身につけている。 ⑬他者と協働しながら作品を創造する喜びや有用性を知悉しており、共同作品を制作する意欲を有している。

ー カリキュラム・ポリシー(CP)

メディア表現学科は、ディプロマ・ポリシー（学位授与方針）に示した資質・能力を総合的に身につけている学生を育成するために、以下のカリキュラムを編成します。

教育内容	①状況に応じて迅速かつ的確な判断及び行動がとれる学生を社会に送り出すために、全カリキュラムの4分の1を超え、3分の1を下回る範囲で実習時間を設定する。学生が自らの関心に合わせて主体的に内容を選択し、本学の建学の理念のひとつである智慧の実践を実現するための実習とする。 ②学生が必要に応じて主体的にプロジェクトの運営組織を構築し、適性などを見極めながら役割分担を決め、到達目標の達成へ試行錯誤を繰り返す PBL（Project-based Learning）を実施する。 ③初年次教育において、学生のニーズにあわせた主体的な学びをサポートするために、基礎科目
-------------	--

	にふさわしい内容の科目（学科が網羅する表現手法の全体像の把握、自己肯定力を高めるためのセルフマネジメント、情報発信者としての基本的倫理観、グループマネジメント能力の涵養等）を配置する。 ④卒業後の進路を見据え、自らの専門分野における知識・技能を体系的に修得するとともに研究方法の理解と実践を進める専門教育を徹底する。コースの区分にとらわれず、学生ひとりひとりのニーズに合わせた自由な履修構成を可能とする。 ⑤専門性向上に資する単科科目を多数設置する。これらの科目については、学生のニーズをきめ細やかに把握した上で、これに応じて科目のブラッシュアップを続けるものとする。 ⑥演習・実習を中心とした専門教育を実施する。2年次はワークショップ、3・4年次に専門ゼミナールとし、1週間に複数時限（原則として3限連続）にわたる科目を設ける。 ⑦実践を通して主体的に情報発信できる技術を身につけられるよう、講義に加え、実習やコンテンツ制作・発表、プレゼンテーションも軸としたカリキュラムを編成する。インターンシップなど外部団体との連携を通じて、実際の仕事現場に立つ就業体験の機会も設ける。
教育方法	①共通教育のみならず、専門教育でもアクティブ・ラーニングをメインとし、他者との協働を通じて問題解決に取り組み、発表する機会を設ける。 ②専門的な知識や技能を確実に身につけるために、学生と教員の距離の近さを意識した少人数での学習を重視し、ワークショップやフィールドワークなどを進める。卒業論文あるいは卒業制作を全学生に課すことにより、学修成果を論理的・創造的に表現し、自らの達成状況を確認する機会も設ける。 ③学生同士が互いの作品やプレゼンテーションをめぐって意見交換し、批評し合う機会（検証・批評の場）を科目ごとに設ける。作品批評や質疑応答、スピーチコミュニケーション、合評会を行うことで互いを高め合い、個々の学修進捗の確認やパフォーマンス改善等につなげることを可能とする。 ④毎年期末に成果を社会へ発信する機会（成果報告書／報告会）を設ける。自らの作品に対する社会からの率直な評価を受けることにより、履修者の精神的成長をもたらす場として効果的に機能させる。
評価	①4年間の総括的な学修成果については、全学生に課される卒業論文あるいは卒業研究・卒業制作とその発表を対象に担当教員が評定と口述試験を行い、DPで示された資質・能力の達成状況进行评估する。 ②作品づくりや表現発信については、教員による評価及び改善点の指摘に加え、学生間での相互評価も行う。成績をつけて終わるのではなく、教員と学生の話し合いを通じ、学生の成長に向けた適切なロードマップの作成と見直しをPDCAサイクルによって実施する。 ③成績評価については、学生からの問い合わせに常時対応し、基準も開示する。 ④学部教育に関しては、教員FDと学生希望調査を通じたカリキュラムアセスメントを実施して教育課程の見直しを図り、継続的に改善を行う。 ⑤卒業時には、カリキュラム改善の指標とするため、質問紙法や面接調査法を用いて学生生活全般に対する総括的評価を行い、KGI（目標達成指標）に基づくカリキュラムのPDCAサイクルを推進する。

ー アドミッション・ポリシー(AP)

メディア表現学科は、ディプロマ・ポリシー（学位授与方針）に示した能力・資質を総合的に備えた学生を育成するために、以下の資質・能力を備えた学生を求めます。

知識・技能	①学科での学びに必要な基礎知識を有している。 ②高等学校の教育課程で履修する科目の内容を理解し、卒業相当の知識を修得している。
思考・判断・表現	③身近な問題にかぎらず国内外の政治、経済、文化、SDGs などあらゆる領域の事象に深い関心を抱き、自身の興味の有り様を自らの言葉で筋道立てて説明又は表現することができる。 ④多様な考え方を自分なりに整理し、考察することができる。
関心・意欲・態度	⑤創造やプロデュースへの憧れを持ち、表現することに強い意欲を持っている。 ⑥「読む・書く・話す・聞く」能力の向上や、他者にわかりやすく伝えるための表現方法の習得に意欲を持っている。 ⑦様々な意見や価値観を受け入れ、配慮ある行動をしようという信念を持っている。 ⑧学科での知識や経験を生かし、社会や地域に積極的に貢献しようという意欲を持っている。 ⑨伝統的メディアや新興メディアなど多様な媒体が発信するニュース・表現に対して積極的に接し、洞察力を高めて真質を見極めようとする姿勢を持っている。